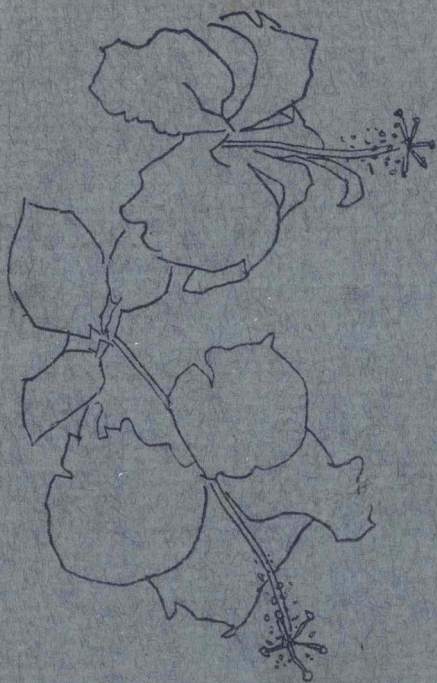




庄野英二著
理論社刊



〈著者略歴〉

関西学院文学部哲学科卒業

日華事変・太平洋戦争で各地に転戦

現在；帝塚山学院勤務，帝塚山短期大学・

大阪市立大学講師

日本エッセイスト・クラブ会員

著書；子供のデッキ，

ロッテルダムの灯（日本エッセイスト・クラブ

賞受賞）

絵具の空

一九六二年二月 第一刷

定価四〇〇円

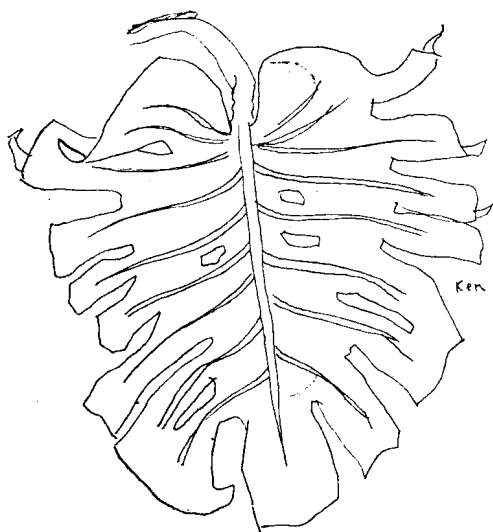
著者 庄野英二

発行者 小宮山量平

東京都千代田区神田神保町一の64
発行所株式会社理論社

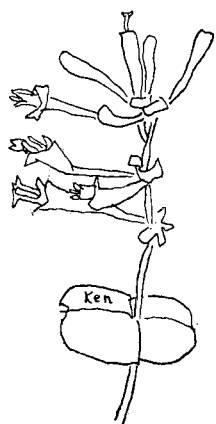
振替東京九五七三六
電話東京四五六八一九

堀内印刷
橋本製本



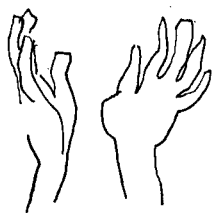
絵具の空／目次

チラチャップの鳩笛／	3
武田麟太郎／	65
花更紗／	115
あながき／	181



そうてい・カット／広田建一

チ
ラ
チ
ヤ
ツ
プ
の
鳩
笛



同じ濃度の絵具の空が、チラチャップの森の町と、
インド洋の上に無限にひろがっていた。

チラチャップ駅は爆撃で駅舎の屋根がとんでいた。汽車をおりたとたん、空が突きぬけていて明るくまぶしかった。

爆撃の跡を見るのはジャワについてから始めてであった。

バタビアからスラバヤへの幹線の途中駅、マオスという寒駅でチラチャップ行の支線に乗りかえると、始めの間はしばらく水田地帯であるが、やがて深い緑のトンネルにもぐりこんでしまう。行けども行けどもうつそうたる樹林の中である。この緑のトンネルの奥にはたして人間の住む市街地があるのだろうかと思議な気がしてならない。車も四等車のような粗末さで、口やかましくしゃべる原住民で一ぱいであった。年のいった女たちはシェリーの葉をかねて口にまっかなつばをためていた。

日本人は私一人で、私の坐席の前には、白い清潔な背広を着た色の白い華人の青年が二人坐っていた。兄弟のようであった。

華人の青年は、丁重に、私にチラチャップへ行くのでしょうかと尋ねたので、私はそうだと答え、それからあたりの景色についてポツリポツリ話しあった。私はインドネシア語はまだ

出来なかったもので、英語と中国語の単語をまぜて言葉をつづった。青年の兄弟はチラチャップに家があった。「チラチャップはジャワの墓場と云われているほど、そんなに暑い所ですか」と尋ねると、そのとうりだと云って笑っていた。

その年（昭和十七年）七月に、南方各地にジュネーヴ条約に基づく正式俘虜收容所が設置されることになり、召集されて内地の補充隊にいた陸軍中尉の私はE少佐と共にジャワ俘虜收容所の所員に任命された。

七月の半ばに宇品を出た輸送船は、潜水艦情報のためマニラにつく迄に半月もかかる始末であった。この調子ではシンガポールをへてジャワへたどりつくのはいつのことになるやら見通しがつかなかった。それでE少佐やその他のジャワ赴任の所員と共にマニラから空路ダバオへ飛んだ。ダバオからセレベスをへてジャワへ行くのには陸軍の飛行機がなかった。海軍機に便乗しなければならなかった。

都合の悪いことにはブーゲンビルの海戦が始まり私たちのような便乗者は後まわしになつてなかなか乗せてもらえなかった。おかげで一カ月ほど飛行機待ちをした。それでもやっと階級の上から順に便乗出来るようになり私はE少佐よりも二週間おくれてジャワに到着した。

パタビアの本所へいって所長のS少将に申告すると、既に、私の勤務先はチラチャップの第二分所に発令されていた。分所長はE少佐であった。チラチャップはインド洋岸唯一の町でオ

ーストラリア航路の港のために出来た町であった。本所にいた若い将校が、ジャワ中で氣候も最も悪くマラリヤが多くてジャワの地獄だと呼ばれている位だと云って同情してくれた。私は觀光旅行にきたのではないから、僻遠の地ほど望む所だと答えた。他のキャンプのある、バタビアやバンドン・マラン・スラバヤなどはオランダ人の住宅が多く、ヨーロッパの市街のように美しく快適だが、チラチャップは原住民のカンポン（村落）だけでレストラン一つ無いらしいと云っていた。

駅舎は日本軍の爆撃によってとばされたのである。港からオーストラリアへ逃げようとする連合軍の輸送船を攻撃し、そのついでに退却列車を狙って爆撃したものらしかった。

改札口を出ると馬車が一ぱい群れていた。下車した原住民たちをのせると馬車の群は、輕快にひづめの音を響かせて走りだした。馬車につけた鈴やしんちゅうの金具が、馬車のゆれるたびに美しい響きをたてて花やかに空に消えていった。

連絡をしていなかったのも誰も出迎えにきていなかった。華人の青年にキャンプへの道順を聞くと、馬車を呼んで私の行李を手伝ってのせてくれて、それから御者に行先をインドネシア語で教えた。私はお札をいって別れた。

馬車は、まっすぐ二百米ほど走ってから、市街地とは反対の淋しい家の無い方角へ道をとった。空を圧するような森の中に道が通じていた。黄色い大輪の花が蔓になって、くさむらの中

に咲いていた。大きなベゴニアの紅い葉のしげみもあった。

椰子林の間に広い草地もあった。やわらかい草がしきつめられて生えていた。それからびんろう樹の並木の間を走った。

椰子林の奥にやがてバリケードのキャンプの入口が見えてきた。

警備兵がすぐにH少尉に連絡をした。

「もうE少佐殿はホテルへお帰りですから、中尉殿はホテルへ申告にいつて頂きましょう。まだ宿舎が配当されていませんので、自分ホテル住まいをお願いします。御案内しましょう」

H少尉は自転車にのって、私の馬車にホテルへ行くように命じた。

ホテルは駅からキャンプへくる途中の舗装道路の右側にあったのだが、タマリンドの大木の中に入りこんでいるので気がつかなかった。

ホテルの名前はベルヒュー、美しい眺めという意味であった。古色蒼然たるオランダ風の平屋建で、中央に食堂があり客室は両翼にあった。屋根の上にタマリンドの大木が枝をひろげていた。タマリンドはホテル同様に年ふりくすんでいた。そして枝にのきしのぶや、白いコチヨウランが寄生していた。

温厚でいつも柔和な笑顔をたたえているE少佐は、私の無事到着を心から祝って下さった。そのうちに軍医のY見習士官もやってきた。

H少尉はジャワ攻略軍の自動車隊から転属してきた若い人で、上州育ちの素朴で謹直な人柄であった。Y軍医は軍病院から現地で転属してきた人で、大学を出たばかりの色の白い長身の女性的な感じの人であった。

ホテルはひっそりしていた。私たちの他に泊っているのは、沈船引揚のために使用されているオランダ人技術者が数名だけとのことであった。部屋や廊下の天井や壁には雨漏りのしみや青い苔がついていた。

浴室にはバスは無く、片隅に小さな水槽があつて小さなバケツが備えられていた。バケツで水を汲んで浴びるのがマンデーという水浴である。

マンデーをしてから夕食をとり、後、私たちはテレスで夕涼みをした。

タマリンドの枝がしげっているために、明るい星空を仰ぐことはできなかった。タマリンドの木の上でひっきりなしにトッケイが鳴いて不気味であった。トッケイというのは大トカゲで、カッコー鳥のような調子で——もうちょっと不細工で不気味な音調であるが——鳴いた。続けばまた数回トッケイトッケイトッケイとくり返して、しばらく沈黙するのであった。H少尉やY軍医の話では、ジャワではトッケイが続けて七回鳴くと幸運があるといわれているのだ。私たちはトッケイが鳴くたびに気をつけて数えてみたが、どれも七回は鳴かなかった。せいぜい五回か六回であった。

私はその晩、ベッドに入ってから、寝くつまでトッケイの声ばかり数えていた。

2 電気機関車

チラチャップの地名は、インドネシア語で、「黒い砂浜」という意味だと後に武田麟太郎さんから教えてもらった。

キャンプは海岸地帯の椰子林の中にあつた。元の兵舎や倉庫や住宅を鉄線で囲って作ったものであつた。

椰子林の南の端れから、インド洋の汀まで二百米ほどの黒い砂浜で、オランダ軍の海岸砲の砲座やペトンでかためた観測所の残骸もあつた。

インド洋から打寄せる波は豪快に渚の砂をまきかえしていた椰子林と黒い砂浜は東の方にはるかに続き、遠く富士に似た姿のスラマツト山がそびえていた。三保の松原から眺める富士の姿とそっくりであつた。

西の方は、僅か数百米の海峡をへだててヌサカンバンガン島のうっそうたる原始林の山があつた。チラチャップ港はヌサカンバンガン島との海峡を利用して作られているのである。

八千人の俘虜達は今の所何の仕事もなく、ひるねをしたり、マンデーをしたり、カードで遊

んだり、散歩をしたりして日を送っていた。これから努めて労役を課するのも私たち所員に与えられた任務であった。俘虜達は暑いので、みんな半ズボンだけの裸でゴロゴロしていた。どの舍内を覗いてもカードをかこんだり、一人でカードを並べたりして遊んでいた。誰一人としてトランプを持っていないものがないような感じであった。

カントールと呼んでいた私たちの事務所は、門に近い一軒の住宅を利用して作られていた。そこにはE少佐やH少尉Y軍医の他、十人程の下士官や軍属が働いていた。日本人の他に、日本語を話すオランダ俘虜や雑用をするための俘虜が一緒に働いていた。

ある日、H少尉がキャンプ内の巡視に出かけて珍しいものを発見して持帰ってきた。当時、まだ海岸地帯には、オランダ軍の鉄かぶとがゴロゴロころがっていたり、倉庫の中から手榴弾や、機関砲の弾丸が出てくるものがあったので危険でならなかった。

その日、H少尉はキャンプの中央にある給水塔を調べるために昇っていった。高い給水塔の屋根の柱の陰にパッキングが二つかくされているのを発見したのであった。おそらくこんな所へは誰も昇る用事はない筈であった。

H少尉が持帰ったのは真新しい、まだ封の切られていない、アメリカ製のおもちゃの電気機関車であった。

パッキングの上に書かれた絵と英語でそれを知ることができた。

私はH少尉の発見をとがめることもできなかったし、喜ぶ気にもなれなかった。H少尉は私の感傷には何のおかまいもなく、包みをひらいた。ピカピカ光るレールと機関車が出てきた。H少尉は無邪気にレールをつないで輪を作った。そしてコードをひっぱってソケットにさしこんだ。

電気機関車は音をたてて走り始めていた。

3 通 訳

俘虜収容所には日本人のマレイ語の出来る通訳が一人配当されていたが、たった一人では間に合わないで、俘虜の中から日本語の出来る者を探しだして通訳の補助にしていた。これらの俘虜はキャンプ中でも一番忙しく、そして管理者と俘虜との間に入って最も気苦労もしなければならなかった。然し言語の疎通を欠くことが、俘虜の待遇その他に影響することが多いので、俘虜通訳は一身の苦勞を犠牲にして同胞のために身を粉にして働いていたようであった。私たちにしても最も便利であるばかりでなく朝晩顔をつき合っているだけになじみも特別深かった。一番日本語の上手なのはヘイブロック中尉で、少年の時に一年ほど病気で寝こんだのが原因で身長がとて高く二メートルはあるかと思われた。応召前は貿易商で神戸にいたこ

ともあり、言葉は優雅で美しく、時々女性のような日本語を使ったりした。敬語もほとんど完全であった。

日本人を妻に持つジョーンズ中尉は、言葉が少々早口であった。やはり神戸に住んだことがあり、奥さんは現在神戸にいるとのことであった。これも応召前は貿易商をしていたようだ。

ロシエンタル老人——階級は大尉だが、応召前はバタビアの中学の先生で、彼はまだ日本へ行ったことはない。バタビアで日本人にオランダ語を教えている間に、日本語を覚えてしまったのであった。語学の特別の才能があるようで十カ国以上の言葉に通じていた。私の父ほどの年齢に当るのだがキビキビ小まめに元氣よく働いておりいつも私と冗談ばかりいていた。彼の父ほどの

俘虜になってからすぐに日本語の勉強を始めたポール。彼は半分ユダヤ人だと自称していた。彼は恋人の写真を肌身離さず持っていた。ニースの海岸でうつした水着姿のグラマーのフランス娘であった。砂の上に寝そべっている姿は有刺鉄線のキャンプの中では、およそ似つかわしいものではなかった。

ネービーとあだ名をつけられていた色の白い貴公子のような海軍中尉がいた。彼は曾て上海へいった時、看板の漢字を見てから漢子の美しさに魅了されてしまった。そしてこれも俘虜になると同時に日本語の勉強を始め、もうそこそこの役立つようになっていた。もののいい方や態度が女性的で会話は極めてスロモーであった。

通訳ではないが、事務長のセントハイゼン軍曹も日本語は出来ないのに通訳の役を結構務めていた。

セントハイゼンは私たちが着任する以前、野戦捕虜収容所の時代から日本人の気に入られて「当番長」の腕章をまいてカントールで働いていた。ユーモラスで気がきいて勤がよく骨身惜まず働くので誰からも愛されていた。私は彼と英語とオランダ語とインドネシア語をませて自由に会話をすることができた。私が着任してから「当番長」の腕章を「事務長」にかえさせたのであった。

4 銘名票

キャンプには八千人の俘虜が収容されていた。殆どがオランダ国籍で他にオーストラリア、イギリス、アンボン、メナド、オランダ領ギアナ、オランダ国籍を持つインドネシア人などがいた。

バンドン附近で降伏した者が大部分で、バンドン附近にはオランダ人の住宅が多いので、管理上チラチャップに移動させられたのであった。

私たちの任務は野戦俘虜収容所を引継いで、国際条約に準じた正規の俘虜収容所を開設し管